

岩手県岩泉町の「南部むらさき染」とその再興を目指したムラサキの栽培

The Nambu-murasaki dyeing in Iwaizumi, Iwate, and project for revival

小山田智彰・山内貴義・新井隆介・鞍懸重和・梅内元太

岩手県環境保健研究センター 地球科学部

〒020-0857 岩手県盛岡市北飯岡1-11-16

Tomoaki Oyamada, Kiyoshi Yamauchi, Ryusuke Arai,
Shigekazu Kurakake and Genta Umenai

Research Institute for Environmental Sciences and Public Health of Iwate Prefecture,
Department of Earth Science, Kitaiioka, Morioka, Iwate 020-0857 Japan

2012年11月16日受付

摘 要

紫根染の染料は、ムラサキの根を使用する。ムラサキは、南部藩にとって幕府献上品として重要な役目を担っていた。宮沢賢治の童話「紫紺染について」には、南部紫根染が描かれている。我々は絶滅危惧種ムラサキの保護のために苗生産法の開発に取り組んできたが、この取り組みにおいて紫根染が本県の歴史や、文化・産業に深いかかわりを持っていたことを再確認した。ここでは、岩泉町八重樫家に伝わる「南部むらさき染」とその再興を目指した取り組みについて報告する。

キーワード：紫根染，宮沢賢治，岩泉町，南部むらさき染，再興

Abstract

Shikon dyeing, a traditional dyeing method using roots of gromwell (*Lithospermum erythrorhizon* Sieb. et Zucc.), was once flourished in Nambu domain in feudal era and the roots were important items to dedicate so Shogun family. The Shikon dyeing in Nambu was also depicted in a children's story "Shikon-zome-ni-tuite (About Shikon dyeing)" by Kenji Miyazawa, regarding its revival. In order to save gromwell which is now listed as an endangered species, we have developed a production method of gromwell seedlings. Through this project, we realized that the Shikon dyeing had an important effect on the local industries and culture of Iwate Prefecture (a former Nambu domain) from the historical viewpoint. In this report we write about our project aiming for revival of the Nambu-murasaki dyeing which has been passed down in the Yaegashi Family, Iwaizumi, Iwate Prefecture.

Keywords : Shikon dyeing, Kenji Miyazawa, Iwaizumi, Nambu-murasaki dyeing, revival

I はじめに

岩手県の伝統産業「紫根染」は、染料にムラサキ (*Lithospermum erythrorhizon* Sieb. et Zucc.) の根が使用される¹⁾。ムラサキは日本の歴史上古くから登場し、万葉集には17首の歌が詠まれている。岩手県に残されている紫根染としては、2011年に世界遺産に指定された平泉町中尊寺が保存している藤原清衡(1056年～1128年)の遺品「紫絹の枕」が知られている。大正から昭和初期にかけて活躍した宮沢賢治(1896年～1933年)の童話「紫紺染について」²⁾は、この時代の紫根染がおかれた状況を知る上で興味深い。「あれは現今西根山にはたくさんございます。私のおやじはしじゅうあれを掘って町へ来て売ってお酒にかえたはなしであります・・・どうもちかごろ紫紺も買う人はなし困ったってこぼしている」という記述からは、平和記念東京博覧会の入賞というニュースはあったものの紫根の需要がなくなり、特産品としての価値を失っていたことが推察できる。

岩手県はムラサキの産地として知られてはいるものの、生産技術が現在まで継承された事実はない。我々は2007年より本格的なムラサキの調査・研究(表1)に着手してきたが、2010年に南部紫根染保存継承者である八重樫義一郎氏・八重樫由吏氏(岩泉町泉金酒造(図1))より、「南部むらさき染」に使用するムラサキの確保について相談を受け取り組んだ。ここでは、岩泉町八重樫家に伝わる「南部むらさき染」とその再興を目指した取り組みを中心に報告する。

II 岩手県の紫根染について

1 歴史に登場する「ムラサキ」

日本では、聖徳太子が冠位十二階で最上位の「徳」を示す色として定めて以来、「紫」に



図1 安政元年(1854年)創業、県内有数の老舗として知られる岩泉町泉金酒造
撮影日:2012年10月9日

対して高貴なイメージが定着した³⁾。紫根染の起源には諸説様々あるが、聖徳太子の死を悼んで建てられた奈良中宮寺の「天寿国繡帳」が、最古の紫染といわれている。歴史および文学的な「紫」資料で見ると最も有名なものとして万葉集がある(表2)。「紫」を詠んだ歌としては、紫の色について11首、花そのものについて6首詠まれている⁴⁾。特に、「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」、「紫草のにはほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも」が有名であり、紫の衣を題材にした歌に、「詫馬野に生ふる紫草衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり」や「韓人の衣染むとふ紫の情に染みて思ほゆるかも」もある(表2)。「紫」は天皇家が使用できる「禁色」であり、武士が使用できるようになったのは鎌倉時代以降となる。江戸時代になって禁色が解かれると「江戸紫」が流行した。將軍徳川吉宗も武蔵野でムラサキを栽培させ、紫根染を奨励した⁵⁾。この江戸紫の需要を支えたのが南部地方のムラサキである。南部藩もムラサキを特産品として保護と増産に努めた記録を残している⁶⁾。

2 ムラサキと紫根染

(1) 南部地方のムラサキ

表1 我々が実施した調査・研究

年	月 日	活動内容
2007	6月23・24日	県北地域の自生地調査 (1回目)
	7月15・16日	ムラサキとセイヨウムラサキの形態比較調査
	11月12日	薬用植物研究論文投稿
	11月14日	ムラサキ胚培養試験
2008	4月5日	ムラサキ培養苗順化試験
	5月20日	薬用植物研究論文投稿
	7月12日	県北地域の自生地調査 (2回目)
	9月9・10日	宮古・岩泉地域の自生地調査 (1回目)
	9月16日	県北地域の自生地調査 (3回目)
	9月22・23日	宮古・岩泉地域の自生地調査 (2回目)
2009	8月20日	盛岡地域の自生地調査
	9月9・10日	宮古・岩泉地域の自生地調査 (3回目)
	9月29日	フローサイトメーターによるムラサキとセイヨウムラサキの核分析
	10月10日	ムラサキ播種試験 (1回目)
	11月16日	自然系調査研究機関連携会議口頭発表
2010	7月2日	ムラサキDNA回収試験
	7月6・7日	ムラサキ苗の植栽試験 (遠野ふるさと村)
	10月27日	ムラサキ苗の植栽試験
	10月27日	ムラサキ播種試験 (2回目)
	12月17日	八重樫吏氏ムラサキの苗生産の相談に来所
2011	6月14・15日	ムラサキ苗の生育調査
	7月13日	ムラサキ苗の植栽試験 (岩泉町八重樫家)
	7月14日	岩泉地域の自生地と栽培地の調査 (1回目)
	9月10日	岩泉地域の自生地と栽培地の調査 (2回目)
	11月16日	ムラサキ苗の生育試験 (岩泉町八重樫家)
	11月17日	ムラサキ播種試験 (3回目)
	11月9日	苗移植後の生存調査 (八重樫家)
	11月10日	岩泉地域の自生地調査 (3回目)
	11月10日	森子親一氏のムラサキ栽培地調査
	2012	4月28日
5月16日		ムラサキ苗の生育試験 (遠野ふるさと村)
5月17日		ムラサキの発芽率調査 (遠野ふるさと村)
7月6日		ムラサキ苗の生育調査 (遠野ふるさと村)
8月7日		ムラサキ苗の開花確認調査 (岩泉町八重樫家)
8月24日		平泉町中尊寺見学 (紫絹枕)
10月9日		ムラサキ播種試験 (岩泉町八重樫家) (4回目)
10月9日		八重樫家南部紫根染の調査 (岩泉町八重樫家)
10月10日		岩泉地域の自生地と栽培地の調査 (4回目)
10月23・24日		県北地域の自生調査 (4回目)
10月28日		セイヨウムラサキの栽培調査 (八幡平市)
10月28日		八重樫家南部紫根染の調査 (盛岡市先人記念館)
10月30日		旧安代町・浄法寺町の栽培地視察 (八重樫ご夫婦)
11月2日		ムラサキ播種試験 (5回目)
11月8日		宮沢賢治作品「紫紺染について」調査 (宮沢賢治記念館)
11月12日	宮沢賢治作品「紫紺染について」調査 (宮沢賢治記念館)	
11月13日	岩手県文化財保護審議会委員中屋洋子氏来所, 紫根染の聞き取り調査	
11月16日	薬用植物研究論文投稿	

表2 万葉集の「むらさき」17首

• あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る	額田王 (巻1-20)
• 紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも	天武天皇 (巻1-21)
• 託馬野に生ふる紫草衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり	笠女郎 (巻3-395)
• 韓人の衣染むとふ紫の情に染みて思ほゆるかも	麻田陽春 (巻4-569)
• 紫の糸をそわが搓るあしひきの山橘を貫かむと思ひて	(巻7-1340)
• 紫の名高の浦の真砂子地袖のみ触れて寝ずかなりなむ	(巻7-1392)
• 紫の名高の浦の名告藻の磯に靡かむ時待つわれを	(巻7-1396)
• 紫草の根延ふ横町の春野には君を懸けつつ鶯鳴くも	(巻10-1825)
• 紫の名高の浦の靡き藻の心は妹に寄りにしものを	(巻11-2780)
• 紫の帯の結びも解きも見ずもとなや妹に恋ひ渡りなむ	(巻12-2974)
• 紫のわが下紐の色に出でず恋ひかも瘦せむ逢ふよしを無み	(巻12-2976)
• 紫の綵色の纏のはなやかに今日見る人に後恋ひむかも	(巻12-2993)
• 紫草を草と別く別く伏す鹿の野は異にして心は同じ	(巻12-3099)
• 紫は灰指すものそ海石榴市の八十の衢に逢へる児や誰	(巻12-3101)
• 紫草は根をかも竟ふる人の児の心がなしけを寝を竟へなくに	(巻14-3500)
• 緑子の・・・紫の 大綾の衣・・・持ち還り来し	竹取翁 (巻16-3791)
• 紫の粉滷の海に潜く鳥珠潜き出でばわが玉にせむ	(巻16-3870)

前述のとおり、南部藩にとって南部紫根染は、幕府献上品として重要な役目を担っていた。盛岡藩四代藩主である南部重信の時代に幕府献上が定例となり、これがきっかけとなって南部地方で産するムラサキの評判が高まった。盛岡藩は領地でのムラサキの私的な流通を禁じ、「紫根染支配人」を配置して、全ての生産と流通を管理した。1800年代には価格が高騰し、盛岡藩は1852年に厨川通滝沢村で開墾を行い、栽培を試みている。その後、価格の下落や栽培上の問題から生産は中止された⁶⁾。厨川通滝沢村が開墾地に選ばれたのは自生地があったためと推測する。この滝沢村に隣接する旧西根町（現在は八幡平市）は、1956年に4村が合併して西根町が誕生して以来、町花をムラサキとしていた。1949年にこの地を訪れた昭和天皇の希望でムラサキが吹上御所へ移植された際も、西根町産のムラサキが寄進されている。

(2) 岩泉町八重樫家に伝わる「南部むらさき染」

盛岡など旧南部領に伝承される紫根染の多くは織った布を染める「絞染」であるが、岩泉町八重樫家に伝わる「南部むらさき染」は、糸の段階で染める「糸染」に特徴がある⁷⁾ (図2)。2012年10月9日に八重樫恵子氏・由吏氏に「糸染」について聞き取り調査を実施した。この技法は、先媒染によって「糸染」を行い、他の植物染の色糸を用いて縞柄を織り込む技法で、八重樫家では、養蚕、製糸、染色、織りまでを一貫して行い、その作品は、帯や着物地、座布団、布団など日常生活の使用を目的にするものであった。「南部むらさき染」の起源については明らかではないが、八重樫家に保存されている縞帳（しまちょう）には、文政八酉載（1825年）と記されており、このことから藩政時代より代々継承されてきた技法であることがわかる。

「民藝」という言葉を生み出した思想家・柳宗悦（1889年～1961年）は、1946年11月末に八重樫家を見学している。柳は作品を見て、実に気品高く、比類なく高雅であると称し、「にしごりを使った糸染という日本の伝統的な紫根染が、跡を断たないように後継者を養うべきである。一度伝統が絶えたとそれを取り返すことは困難である。この世に紫の色は種々あろうが、紫根の色の高貴さに及ぶものがあるか」と絶賛したという。これを機に雑誌『工藝』⁸⁾に紫根染特集号を計画したが、残念ながら企画は頓挫した。しかしこれがきっかけとなって、1959年に八重樫フキ・フジの両氏（故人）が岩手県無形文化財保持者に指定、2008年3月4日には、「紫根染 八重樫家関係資料」20点が岩手県有形民俗文化財の指定を受けている^{9・10・11)}。また、岩泉町教育委員会は、八重樫家の紫根染技法を同町の無形文化財として指定し、技術保持者として八重樫恵子氏を認定した。最近では、2012年10月6日から岩手先人記念館で開催された企画展「民藝に魅せられた人々」において八重樫家に伝わる「南部むらさき染」の文化価値を紹介した。このように岩手県屈指の文化財として評価を受けている八重樫家の「南部むらさき染」ではあるが、現在はこの技術を行うために必要となるムラサキの根などの材料を確保できず、技術継承が危ぶまれている。

III 野生ムラサキの現状と「南部むらさき染」の再興を目指した栽培

(1) 岩手県の野生ムラサキ

日本においてシコニン含有している植物はムラサキ1種であるが、中国の中薬大辞典によると中国原産のシコニン含有植物は、7種が記載されている¹²⁾。岩手県内の紫根染に使用されている植物は、瀨紫草 (*Onosma panicula-*

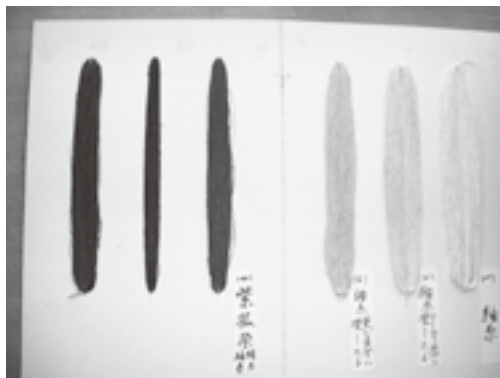


図2 八重樫家の糸染（八重樫由吏氏提供）

tum Bur.et Franch.) であり、ムラサキは一部しか利用されていない。

ムラサキのシコニンは根の表皮付近に形成されるため、これを得るには、全草採取が必要になる。種子の採取を行わずして全草採取を繰り返すと、絶滅の危機に直面しているムラサキにとって、紫根染を目的とした生産行為そのものが自生を圧迫する要因になることもある¹³⁾。我々は岩手県における野生ムラサキの現状について2007年から継続した調査を進めている。現在までに八幡平市（旧安代町）に確認していた自生地は消滅しており、確実に確認できるのは、岩泉町1か所のみである。ただし、個体数は1株であり、岩手のムラサキは野生絶滅に直面している。環境省版レッドデータブックによると、ムラサキの減少要因は管理放棄・植生の遷移による草地の減少、園芸用の採取があげられているが、さらにセイヨウムラサキ (*Lithospermum officinale* L.) の拡散による交雑が原因となる淘汰が考えられる (図3, 4)。

(2) 「南部むらさき染」の再興を目指した栽培
絶滅の危機に瀕したムラサキの保護対策として、栽培の形で保存されてきたムラサキが絶滅を回避するための重要な資源になること



図3 ムラサキの栽培地・自生地とセイヨウムラサキの拡散状況 (2012年11月13日現在)

は間違いない。我々は、野生のムラサキから採取した種子を利用して苗生産に取り組んできたが¹⁴⁾、この方法で作出した苗 (図5) は、紫根染や薬用¹⁵⁾ などの材料としても利用が期待できる。我々以外に野生の種子を起源として栽培を行っているかどうかの有無について情報収集と確認調査を行った結果、岩泉町の森子親一氏、八幡平市の小船清悦氏が自生地の種子をもとに栽培を行っていることが判明した。そこで2011年11月10日に八重樫義一郎氏・八重樫由吏氏の案内により岩泉町安家江川地区でムラサキの栽培を行なっている森子氏を訪ねて調査を行った。その結果、森子氏は30年前に自宅正面にある山からムラサキを採取して栽培していることが分かった (図6)。自生地の状況については、おそらく残っていないだろうと証言している。毎年種子を採取して発芽を行っているが、発芽するのはごく



図4 セイヨウムラサキ 撮影日：2012年6月25日 (表3サンプル番号5と同じ個体)



図5 八重樫家の栽培地に定植1年後に開花したムラサキ 撮影日：2012年6月4日 (表3サンプル番号2と同じ栽培地)

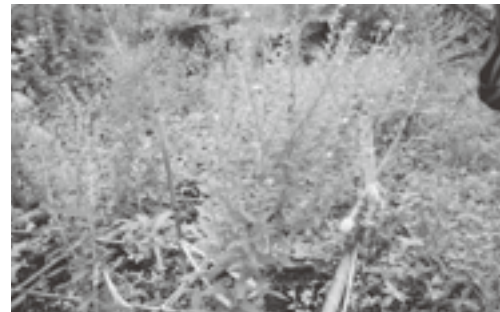


図6 森子親一氏のムラサキ栽培地 八重樫由吏氏提供 撮影日：2011年8月2日 (表3サンプル番号1と同じ栽培地)

わずかであり、発芽法に悩んでいるとのことであった。栽培地のムラサキを観察したところ種子が残っており、苗1株と種子を提供していただいた。八幡平市清水の小船清悦氏は、

岩手県北部に位置する八幡平市と二戸市の境界付近に自生していたムラサキから種子を採取しており、我々が確認していた旧安代町（2012年に消失を確認）や岩泉町の自生地とは場所が異なる。小船氏によると種子を採取したのは15年から20年ほど前であり、外来種との交雑も心配されることから、八幡平市と浄法寺町の2か所に畑をつくり栽培を行っている」と説明した。自生地の状況については、最近を確認していないが周辺環境が当時とはだいぶ変化しており、自生が残っているかわからないと証言している。2012年10月30日に小船氏のムラサキ畑を八重樫氏が視察し、八幡平市と浄法寺町の2か所のムラサキ畑で小船氏が栽培した苗1株と種子および根のサンプルを提供していただいた（図7）。今後は提供された苗や種子を材料にして、我々が開発した苗生産法によるムラサキの大増産を進め、野生復帰の実現や「南部むらさき染」の再興にまで成果を昇華させたい。



図7 小船清悦氏のムラサキ畑 八重樫由吏氏提供
撮影日：2012年10月30日
（表3サンプル番号3と同じ栽培地）

士に提出した（表3）。今後は各サンプルのシコニン含量を分析した上で草野博士らが開発した筒栽培¹⁵⁾を参考にしながらより良い根が生産される栽培方法を開発したい。

謝 辞

「南部むらさき染」の調査について八重樫恵子氏・八重樫義一郎氏・八重樫由吏氏より貴重な情報の提供とご指導をいただいた。森子親一氏と小船清悦氏より自生地由来ムラサキの苗、種子と根の提供をいただいた。岩手県文化財保護審議会委員である中屋洋子氏より「紫根染」に関する情報と奈良県の万葉植物園由来ムラサキの根を提供いただいた。心より御礼申し上げる。

IV おわりに

今回の調査・研究において確認された野生ムラサキを起源としている各栽培地のムラサキの根、奈良県の万葉植物園で栽培されていたムラサキの種子から栽培したムラサキの根、ムラサキと誤認栽培されているセイヨウムラサキの根を薬用植物栽培研究会草野源次郎博

表3 シコニン含量測定のため提出したサンプル

サンプルNo.	種名	サンプル数	採種地	根色※	栽培地	栽培形式	栽培経過年	採取年月日
1	ムラサキ	1	岩泉町（野生）	赤紫	岩泉町安家	露地栽培	2	2011. 11. 10
2	ムラサキ	2	旧安代町（野生）	赤紫	岩泉町岩泉	露地栽培	1	2012. 10. 14
3	ムラサキ	2	二戸市（野生）	赤紫	八幡平市清水	露地栽培	2	2012. 10. 30
4	ムラサキ	2	二戸市（野生）	赤紫	浄法寺町	露地栽培	2	2012. 10. 30
5	ムラサキ	2	奈良県万葉植物園	赤紫	盛岡市	プランター栽培	4	2012. 11. 13
6	セイヨウムラサキ	2	八幡平市	白	八幡平市	露地栽培	2	2012. 10. 28

※根色は収穫直後に目視で確認した色を示す

参考文献

- 1) 佐島直三郎 (1981) 南部むらさき, 南部むらさき染研究会.
- 2) 宮沢賢治 (1995) 紫紺染について, 宮沢賢治全集第十巻童話Ⅲ本文篇, 筑摩書房.
- 3) 三浦三郎 (1975) 日本のムラサキ, 染織と生活季刊11号, pp.9-17.
- 4) 木田隆夫 (2006) 手づくり万葉植物園の四季, 岩手日報社, pp.68.
- 5) 四條たか子 (2005) よみがえる南部ムラサキ, 議員情報レーダー, pp.41-51.
- 6) 片倉信光・佐藤忠太郎 (1975) 南部の紫根染, 染色と生活季刊11号, pp.53-55.
- 7) 八重樫金十郎 (1975) 岩泉の紫根染, 染色と生活季刊11号, pp.61-62.
- 8) 八田善穂 (2010) 柳宗悦の民芸 (XXXIX) - 雑誌『工藝』と日本民藝館 -, 徳山大学論叢71号, pp.271-276.
- 9) 田崎農巳 (2012) 岩泉の糸染, 第48回盛岡市先人記念館企画展「民藝に魅せられた人々」, 盛岡市先人記念館, pp.5.
- 10) 泉金酒造. <http://www.ginga.or.jp/~senkin/history/index.html> (確認: 2012.10.8)
- 11) 高橋貞子 (2007) 安家紫根染, 熊谷印刷出版部, pp.73-79.
- 12) 江菱新医学院 (1986) 中薬大辞典, 上海科学技術出版社.
- 13) 環境庁自然保護局野生生物課 (2000) 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータ-8 植物 I (維管束植物), pp.334.
- 14) 小山田智彰・山内貴義・鞍懸重和 (2012) ムラサキ (*Lithospermum erythrorhizon*) 苗生産法の開発, 薬用植物研究34巻1号, pp.31-36.
- 15) 末岡昭宣・酒井美保・吉岡達文・草野源次郎 (2009) 薬用植物の筒栽培1 ムラサキの試験栽培1, 薬用植物研究31巻1号, pp.36-44.
-
- 小山田 智彰 (おやまだ・ともあき) ●
- ・出身地: 岩手県盛岡市
 - ・岩手県立大学大学院博士後期課程修了 博士 (学術) 専門: 植物バイオテクノロジー
 - ・岩手県環境保健研究センター地球科学部
 - ・希少植物や地域在来種を対象に種の保存や地域資源の活用 (品種開発) に取り組む
-
- 山内 貴義 (やまうち・きよし) ●
- ・出身地: 東京都目黒区
 - ・東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了 博士 (農学) 専門: 動物生態学
 - ・岩手県環境保健研究センター地球科学部
 - ・遺伝子解析によるツキノワグマの生息数推定の研究に取り組む
-
- 新井 隆介 (あらい・りゅうすけ) ●
- ・出身地: 埼玉県秩父市
 - ・信州大学大学院農学研究科修士課程修了
 - ・岩手県環境生活部自然保護課を経て, 岩手県環境保健研究センター地球科学部
 - ・半自然草原の生物多様性保全の研究, いわてレッドデータブック改訂業務
-
- 鞍懸 重和 (くらかけ・しげかず) ●
- ・出身地: 栃木県真岡市
 - ・岩手大学大学院農学研究科修士課程修了
 - ・岩手県環境保健研究センター地球科学部
 - ・主な業務は, 地理情報システム (GIS) データベースの維持管理など
-
- 梅内 元太 (うめない・げんた) ●
- ・出身地: 岩手県紫波郡矢巾町
 - ・岩手大学人文社会学部卒業
 - ・岩手県環境保健研究センター地球科学部
 - ・主な業務は, 遺伝子解析によるツキノワグマの生息数推定の研究など